貴方には貴方の、私には私の物語を

鴨南蛮ver.2

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

物語にはヒーローが、ヒロインが必要である。

そして誰だってそんな存在になりたいって思いながらもモブとしての道を歩いている。

けど、そんなのはつまらなくないかい？

誰かと同調し、頷き賛同し、半歩引いて自分の思う主人公の後ろを歩く。

そんなのはつまらなくないかい？

誰だって自分の物語があっていいものだとは思わないかい？

本来は”彼女たち”の物語である。

だがこれは”彼女”の物語。
ヒロインとしての彼女が、ヒーローと出会う物語である。

目次

白金燐子の物語 1 ―― 1
白金燐子の物語 2 ―― 7

白金燐子の物語　1

今日も、チャイムと共に学校が始まろうとしている。
小学3年生に上がるとともにクラスが変わり、見知った人も一部いれば全く知らない人もいる。
どちらにしても私の話せる相手はいません。
だから今日も俯いて過ごす。
先生が入ってきて点呼が始まる。
「白金燐子さん」
「…はい」
先生は声ではなく、視線にてこちらを確認して出席簿にチェックをいれる。
私の声は小さいし、席は1番後ろだ。
聞こえなくて当然だと感じる。
直したい。けど直すことはできない。
周りの人の視線が怖いからだ。

悪意があるとかないとかではない。
単純に注目されるのが……つらい。
だからこそ思う。

隣の人は私から目を逸らしてはくれないのでしょうか…

厳密には呼ばれる人の方を毎回見るのですが、最後にはこちらに目が帰ってくる。
（隣の席のこの人の名前はなんでしたか…）
少し前の点呼の記憶を遡ります。
鉄一途（くろがね　かずと）くん。
名前に近いものを感じたのでよく覚えています。

居心地の悪さを感じているうちに点呼が終わり、一限目が始まるまでの小休憩になります。
なった瞬間…
「なぁなぁ！白金ちゃん！ぼく鉄って言うんだ！」

「…あの、その……そ、そうですね」
犬が駆け寄ってくるようにすごい勢いで詰め寄ってくる鉄くん。
どうしていいかわからず、頷くことしかできない。
「お揃いだねぇ～」
そういってにへらと笑う鉄くん。
「そう…ですね」
相変わらず頷くことしかできないのですが、鉄くんは満足そうに頷き、またにへらと笑いました。

これが私と彼の最初の出会い。
なんの変哲のない、ただの出会いでした。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～

俺には気になる人がいる。
３年生に上がり、隣の席になった女の子。
なんと白金と言うらしい。鉄の自分の名字と比べ、白黒で見事対比になっている。

これて運命を感じないわけがない！
ぼくはこの子と友達になるためにこのクラスになったのだ！
そして早速話しかけ、お互いの名前を言い合ったことに満足し、休憩時間を終えた。
ん？あれ、これ仲良くもなんもなってなくないか？
自己紹介にもなってなくないか？ん？けど名前名乗ったから自己紹介じゃないのか？あ、けどぼくは名乗ったけど白金ちゃんは名乗ってないは。これは自己紹介もなにもできていないのではないか？
まてまて、まだ焦るところではない。
最初の授業は自己紹介と相場が決まっている！
これは仲良くなるために一発かますべきではないのか？いや、かますべきであろう！
さてどうする…父さんから聞いた仲良くなりたい時に言う言葉を思い出すんだ！
よくわからないけど、”なんぱごろく？”だとかいって教えてくれた言葉を思い出すんだ！
何て事を考えている間に自己紹介がもう始まっているじゃないか！
「あ」から始まる人から始まり今既に「か」から始まる人のところまで来てしまっている。
残された人は3人。その間に父さんの言葉を思い出せ…！
「次、鉄くんどうぞ」

「っ！はい！」

まだ思い当たっていないのに自分の番が来てしまった…だと（絶望）

このクラスの自己紹介の早さは化け物かっ!?とかｃｖ．池田さんで頭に流し仕方ないので勢いに身を任せる。

「鉄一途です！ぼくがこのクラスでやりたいことは、白金燐子ちゃんを愛したいです！」

そういった瞬間静まり返る教室。

そして俯いてばかりだった隣の白金ちゃん顔をあげたのを感じ、そちらを見る。

自己紹介（一方的名乗り）のときは不安げに揺れていた目は見開かれ、口は呆然としている。

そして真っ正面から見た彼女の顔は…

「「「「えええええええ!!!」」」」

静まり返った教室が時間の流れを取り戻し至るところで歓声が上がる。

そこから始まるぼくへの質問。

どこが好きなの？だとか、なんで好になったの？みたいな質問が連続してあがってくる。

なんで好き嫌いの話になるんだ？と疑問に思いながらも白金ちゃんを見て思った好

きな部分を返していく。

（なにか言葉間違えたかなぁ、やらないか？が正解だったのかなぁ。それとも今夜どう？あと父さん何て言ってたかなぁ…あっ！手のひら向けてこれでどう？ってやればよかったのか！）

そんなことを考え出してしまったせいでぼくは忘れていく。彼女の顔を見て何を思ったのか。

ただひとつ決意する。

絶対白金ちゃんと友達になると。

白金燐子の物語　2

「へぇ、りんちゃんってピアノやってるんだね」
「うん、幼稚園の頃からやってるんだ」
　あれから1月が経ち、白金ちゃんとも大分打ち解けてきたように思う。
　最初の頃は周りからちやほやされたり、白銀さんが緊張して話が続かなかったりしたが、今では慣れたことで、言葉に詰まるようなこともなくなってきた。
「かずくんもなにか習ってることとかあるの？」
「習い事はしてないなぁ、けど父さんに習っていろいろ作ったりしてるのだよ！」
　そのお陰か、呼び方も”かずくん”に”りんちゃん”と愛称で呼ぶようにも慣れた！
うん、かんばった！
「いろいろって例えば？」
「例えばって言われると困るけど、絵も描くしアクセサリー作ってみたりとか…うん！
とにかくいろいろ」
「ふふふ、かずくんって多芸なんだね」

「ん、タゲイ？」
「いろいろなことが出来るねってことだよ」
「おぉ、そういう意味なのか！」
　りんちゃんは俺に比べて遥かに頭がよく、こんな感じでよく物をおしえてもらっている。授業でいつもお世話になっておりますっ！
　よく授業で指されて困っているときとか、こっそり答え教えてくれるんだよね。マジ天使。
「けどピアノって凄いなぁ、両手でカタカタなんて出来る気しないわ」
「カタカタってパソコンみたいだね…、慣れたら出来るようになるよ」
「慣れるまで練習できるのがすごいと思うのです。そうだ、今度聞かせてよ！」
「え…うん…いいよ？」
「なぜにはてな？」
「だって…人に聞かせる自信なんてないから」
　そういってちょっとそっぽ向くりんちゃん。
　ん～上手く弾くことって必要なのかなぁ。ぼくもよく絵を描いては自分で父さんのと比べてへたっぴって思うけど、父さんは上手だって言ってくれるし、この絵はこの絵で好きっていってくれる人だっているって母ちゃんが言ってくれる。

父さんを真似ていろいろ作るけど、どれも父さんのようには上手く作れない。父さんも自分で自分の作品をまたは作れないって言ってる。

『この世に同じものはない、同じものって言うのはつまらないことだよ』

これは父さんの言葉だ。母さんにそのあと

『クローンって同じものよねぇ』

って言われて膝から崩れ落ちていたけど。

ぼくはそれだけじゃあなんのことかよくわからなかったけど、次の言葉でよくわかった。

『そうだなぁ…周りのみんな、友達のけんくもんゆうくんもはるくんも、全員が全員同じ顔で、同じ声で、同じ反応をする。それって楽しい？』

ぶっちゃけホラーだ。

けどよくわかった。誰もが同じ反応をして同じものが返ってくるなんてそれはつまらないって。

うん、何を考えてるかわからなくなってきたが、目の前のりんちゃんの方がぼくが何を考えてるかわからなくて不安そうな顔をしておる。

だからぼくの伝えるべき”ことば”はなんだろうか。

それはたぶん…

「ぼくは、りんちゃんの音が聞きたいんだ
…りんちゃんのだから聞きたいな」
今週末、りんちゃんの演奏を聞かせてもらうことになりました。とても楽しみです。
あれ、作文？

Ｓｉｄｅ：Ｒｉｎｋｏ～ちょっと前のお話し～

最初は怖かったです。
名前が似通っているというだけど話しかけてきた鉄くん。
そもそも私は目を会わせて話すことが得意じゃないです。なのに鉄くんはまっすぐに私の目を見つめてきます。
だから私は鉄くんの方を一切向けませんでした。

そうしたら鉄くんは
「何かわからないけどごめんなさい！」
「…ふぇ？」
必死に謝ってきました。

そこで私は久しぶりに、鉄くんの目を見ました。
子犬のように無邪気にくりくり輝かせていた目は不安そうに揺れ、まるで飼い主に怒られたあと、こちらを伺ってくるような目になっています。
あ、何かかわいいなぁ。
少しだけ怖くなくなりました。
「えっと…どうしたんですか?」
「ぼくがなんかやっちゃったのかなぁって…
目を会わせてくんないし…」
「…鉄くんは何も悪いことはやっていませんよ」
「じゃあなんで?」
なんで、と聞かれましても…
「その…私は何と言いますか…人と話すことが得意じゃなくてですね…その…どうすればいいのかわからないんです」
「うーん、それじゃあ話してみよう!話して、話して、知って、わかって、そうすれば大丈夫!多分!」
すごい自信満々な口調なのに弱気な言葉尻。
そんなアンバランスな言葉と、無鉄砲な言葉。

私は、そんな無鉄砲さを見習いたく思った。